

弘前大学

弘前大学 慶北大学 国際交流プログラム報告書

弘前大学人文学部経済経営課程

李ゼミナール

2016/07/03



14H3019 小野幸丞

14H3025 川口晃太郎

14H3030 工藤透生

14H3035 児島楓華

14H3072 中林大紀

14H3091 堀川瑛美子

14H3097 眞土修太郎

14H3112 山口紘史

〔 1 〕 国際交流プログラム報告

1. 弘前市内および周辺地域視察……………p3
2. 慶北大学 1 班 Lightning bug 『Turn on the light』 ……p4
3. 慶北大学 2 班 安心、ステーキ 『安心、壁破 project』 ……p5
4. 慶北大学 3 班 酒 TOPIA 『The We ‘더 위’ 』 ……p7
5. 大邱市内およびソウル市内視察……………p9
6. ワークショップ I 「就職するなら地元か東京・ソウルか」 ……p11
7. ワークショップ II 「新しい教育プログラムを考案せよ」 - グループ 1
……………p13
8. ワークショップ II 「新しい教育プログラムを考案せよ」 - グループ 2
……………p15

〔 2 〕 国際交流プログラム感想

弘前大学 李ゼミナール

1. 小野幸丞……………p17
2. 川口晃太郎……………p18
3. 工藤透生……………p20
4. 児島楓華……………p21
5. 中林大紀……………p23
6. 堀川瑛美子……………p25
7. 眞土修太郎……………p27
8. 山口紘史……………p30

〔1〕国際交流プログラム報告

1. 弘前市内および周辺地域視察

日本フィールドワーク日程

1日目 土手町・弘前中央食品市場

2日目 岩木山神社、りんご公園、黒石市、田舎館村など弘前周辺地域

4日目 弘前公園、ねぷた村、禅林外など弘前市内

私たちはPBLプログラムの一環として弘前市内やその周辺地域の視察と、弘前市内の観光案内を行った。

初日は弘前中央食品市場の視察をした。弘前の市場は規模が小さく、客も少なかった。一方、私たちは韓国で西門市場の視察もしたが、韓国の市場は規模が大きく多種多様な商品が並べられており、常に客で溢れていて活気があった。このことも背景にあったのか、弘前の市場に対する韓国の学生の反応も小さく、あまり興味を示さなかったように感じた。その後は土手町周辺を歩いて案内したが、歩く距離が長く、疲れている学生もいた。

2日目にはりんご公園と公園内にあるシードル工場 kimori、黒石こみせ通りの視察、そして岩木山神社と田舎館田んぼアートの案内をした。kimoriの高橋さんからは日本のりんごの歴史や、海外とは違う日本特有のりんごの作り方などを聞くことができ、学生は熱心に話を聞いてメモや質問をしていた。こみせ通りでは酒蔵や日本ならではの家屋を見ることができた。私たちにとっては当たり前のものではあったが、韓国の学生には新鮮に見えたようだ。

4日目は弘前市内の観光案内をした。弘前市観光館、弘前城、ねぷた村、禅林街など弘前の伝統文化や歴史について学んでもらった。しかし、自分たちも弘前について知らないことが多いことを実感した。

案内をして感じたことは、韓国の学生は日本人にとって普通で、目に留めないようなものに関心を示していて、資源として見ていたということである。疑問や関心を向け続けることが新しい発想や積極性に繋がっていると思った。

日本を案内する上で良かった点としては、それぞれが自分の役割を決めて案内できたこと、韓国の学生とコミュニケーションを取れたこと、事前に案内場所に行って確認したことなどが挙げられる。また、反省点は情報不足、準備不足、案内場所の時間配分がうまく

できなかったこと、韓国の学生の質問に答えられなかったこと、自分たちの英語での案内が本当に理解してもらえたか不確実な点がある、ということがある。

弘前や周辺地域の案内を通して学んだことは自分が知らないことについて案内することはできないので、自分たちが弘前についてもっと知る必要があるということは強く感じた。そのためにも現地に直接行く、もっと情報を集めるなどして知識として蓄えるべきである。また、英語力不足を実感した。英語での案内の内容は自分だけで解決させずにメンバーにも聞いてもらい、確認や校正すればより理解しやすいものになるはずである。また、様々なものを案内する際には内容を紙に書いて渡しても良いと思った。これらの改善点は今後の課題として取り組んでいきたい。

2. 慶北大学 1 班 Lightning bug 『Turn on the light』

このプレゼンテーションは香村洞に活気を取り戻す活動についての内容であった。香村洞は1980年代頃までは無窮花デパートのオープンによって、多くの学生でにぎわっていたが、東城路に大邱デパート、冬芽デパートのオープンと、地下鉄がその地域の近くにできたことにより、荒廃が始まった地域である。若者の客足が減ると、多くの大人の店や違法ギャンブルの場ができた。その結果、雰囲気が暗く、汚れた町としてのイメージがついてしまった。この問題点を解決し、町のイメージと雰囲気を改善、再興するために、さまざまな取り組みが行われた。朝鮮戦争の時代、多くの作家が戦争から逃れるために香村洞と北成路に引っ越し、その地域で芸術活動を行った。そうした背景から、香村洞の再興には歴史と文化に関連したものが多い。具体的には文化的なカフェのオープンや古く暗い雰囲気の路地の壁を住民がペイントするという内容だ。

1 班の発表を聞き、地域の再興にはその歴史と文化を用いる方法がより身近で認識しやすい方法であると改めて実感した。行政が主体となって、地域の復興に関する取り組みを起こすイメージが自分の中では強かった。そのため、発表で聞いた香村洞での取り組みは、自分の考え方を变える良い機会になった。また、壁のペイントのように参加型のイベントは、その地域への愛着の創出へつながり、地域活性化に大きな効果があるはずだ。私たちのゼミでの活動、研究の参考にしたい。

II. Main point - 2. - 2) details of the plan

Painting murals

Of the resident/By the resident
/For the resident
香村洞 mural alley

Making brightening village by
decorating many dark and old wall

〈possible scenario〉

The initiatives with local resident and ask
for their permission and participation, we
will carry out our plan in the manner of
voluntary service by students and local
organizations



壁へのペイント

プレゼンテーションの様子



3. 慶北大学2班 安心、ステーキ『安心、壁破 project』

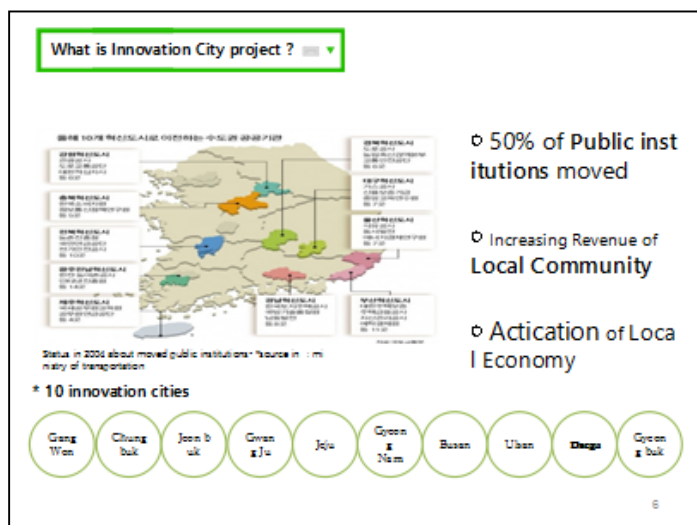
韓国国内ではソウルへの様々な一極集中が起こっており、それを解決するためにイノベーションシティと呼ばれる10個の都市に公共機関を移設する取り組みを行っている。このイノベーションシティプロジェクトには首都エリアの人口過剰を減らす、地方イノベーションを高める、地方の教育水準を高める、税収を増加させ地方経済を活性化させるなど様々なメリットがある。このイノベーションシティの1つとして選ばれているのが大邱市である。そのため、大邱市にも3つの大きな機関が移設され、仕事のために移住してきた人々が新たに住み始めている。しかし、そこで新たな問題が起こってきている。それがもともと大邱市に住んでいた人と外部から来た人々との間にある“壁”の問題である。この壁は高速道路によって住むエリアが分けられてしまっているという物理的な壁と、新しく住み始めた人と大邱市に元々住んでいた人々との間でコミュニケーションが行われないことによる心理的な壁の二種類がある。この問題の解決に取り組んだのがこの研究である。この問題解決のために、連続的なつながりと同じ目標のために活動する共同体のことである「コ

ミュージン」のを用いている。地元のを販売するフリーマーケットや Do It Ourselves という自分たちで使うものを自分たちで作る、等といった教育や生活と密着した活動を行っていく。このような活動を通じて、集まって参加した人々の交流を通じて壁を突破していくことができるのではないかというものであった。

この研究では、高速道路で生活圏が分けられてしまっているという物理的な壁の問題だけでなく、生活の違いなどによる心理的な壁にまで目を向けているところで非常に内容の濃いものになっていると感じた。弘前市においても大学進学のために他県から来ている人も多く、文化や気候の違い、また、方言によって地元の人々と距離を感じてしまうことがあると考えられる。このような壁によって地域の中での交流が妨げられることもあるのではないか。高齢化が進んでいる地域や、閉鎖的な雰囲気のある農村などにおいて若い人々や他地域の人々との交流が促進されることで地方も活性化されることが考えられる。自分たちのゼミナールでも地域間交流による郷土愛の創造と地域活性化に取り組んでいるため、このような人々の間にある“壁”を“突破”していくことは非常に重要な課題であり、とても参考になる内容であった。



イノベーションシティの現状



4. 慶北大学 3 班 酒 TOPIA 『The We ‘더 위’ 』

このプロジェクトでは都市と周辺地域の交流について、慶北とその周辺地域に焦点を当てて考察している。この主題の選定理由としては慶北地域には頑固、保守的な田舎、特色がないといったイメージがあるからである。このイメージを払拭し、よりポジティブなイメージを根付かせることで地域間の連携や発展を試みた。そこで活用できる媒体として考え出されたのが伝統酒である。伝統酒は韓国人にとって昔からあり、物語にも出てくるようななじみ深いものである。また酒を飲むことを通じて人と人、文化と歴史、過去と現代の疎通を助けることができる。

酒の機能



- ✓ 人と人の間疎通の媒体
- ✓ 文化と歴史を渡す媒体
- ✓ 過去と現代のつながり

WWW.YOURDOMAIN.COM
Phone: +(333) 123 4567 | e-mail: your@domain.com

この伝統酒を活用し地域と地域間の交流や伝統と現代をつなぐ地域といった新しいイメージを生み出そうと考えた。具体的には大邱から始まる高速道路に沿ってクニイ、アンドン、イエチオン、ヨンジュを通りそれぞれの地域の伝統酒をつなぐ伝統酒ロードを構築し、それぞれの伝統酒を体験できるような活動を考察している。



WWW.YOURDOMAIN.COM
Phone: +(333) 123 4567 | e-mail: your@domain.com

活動内容は各地に赴き伝統酒を体験、地域の人々にヒアリング調査を行うなどして、伝統

酒にまつわるエピソードや文化的な背景を学び交流活動の可能性について検討した。たとえば一日いっぱいのワインというパラダイムに代わって精力増強で有名な如酒を飲むことの提案、昔からの伝統酒とともに伝統的なSEON-BIの精神（清廉潔白）を広める、といったことを介して時代間や地域間の疎通を考察した。

この中で重要な点としてあげられることは伝統酒が単体で地域間、人與人、さらには時代間の疎通の媒体となることである。伝統酒はそれを買うことのとどまらず、だれかと飲むというように人との交流が容易である。さらに伝統的なものであるためその地域の特色、文化、歴史などともかかわることができる。これらを組み合わせることでより多角的で効果的な交流ができる。またこのように一つのもので様々な交流ができることで、それに関するイベントなども多種にわたって計画することができる。したがって交流活動を考えるときは伝統酒のように様々な疎通ができる媒体を中心に考えることが一つのキーポイントになる。

パワーポイント、発表についても日本人学生向けに日本語を中心としていて非常にわかりやすく、また聞いている学生に対して質問しながら進めていくなどの工夫されていた。内容についても各伝統酒について掘り進められて、かつ様々な特色エピソードが調査されていて可能性を十分考察できるものであった。一方でこの伝統酒ロードは高速道路を基にしていることや、韓国では今、健康ブームが来ていることなど、韓国についての地理や背景などの認識が薄かったため理解が追いつかないところもあった。またこれらは伝統酒ロードを構築するということとと留まっておき、具体的なイベントや計画については学生ができることではないため考慮されていなかったが、たとえばどのように民間あるいは行政を巻き込むか、といったようにもっと踏み込んだ考察や、学生だからこそ考えられる奇抜なアイデアなどについても触れられているととても良かったと思う。

この発表を聞いた感想としては、自分たちと同じように交流活動を考えるうえで伝統や文化といったことに焦点を当てていて、自分たちの方向性が合っている裏付けになったように感じた。伝統というのはその地域の特色であり、特色を生かした交流というのは親しみやすく様々な人が興味を持ってくれると思う。今回の活動を通じてこういった考え方は万国共通のものであるとわかったので、視野をもっと広げて世界各国の実例なども参考にしてみることも大いに活用できることなのではないかと感じた。

5. 大邱市内およびソウル市内視察

韓国フィールドワーク日程

- 1日目 香村洞・東城路
- 2日目 伝統地域など
- 3日目 正門市場・香村文化館
- 4日目 ソウル市内

1日目

香村洞を歩き、慶尚監營公園を見た後、香村洞へ行った。香村洞は、昔は大邱市の都心として栄えていた場所で、戦時中に作家たちが避難生活を送ったことで文学の歴史を持つ地であるが、今では暗くなって、夜の街と化しているところもある。その路地にはいくつかのカフェがあり、それらはこの場所に活気を取り戻そうと発起した人たちによって始められたものである。そのカフェに行ってお話を伺った。そこでは昔の様式の建物が並んでいて、それを壊さないように文化を守りながら、活動を行っているという。その後に向かった東城路では一遍して、まさに若者の街というような流行を先行くショッピングモールやデパート、映画館に公演ホールなどの文化空間、ロデオ通りやコスメ通りなどで賑わっていた。



2日目

伝統酒を作っている地や安東河回村という豊山柳氏が代々暮らしてきた韓国の代表的な同性村などを見て回った。伝統酒である「如如酒」は文化を守るために薬草を使った漢方のお酒を作っているという。韓国では焼酎が主流で、これに薬草や木の実を漬けて、果実酒として販売するという。安東河回村は2010年に伝統的建築物の調和や配置方法、伝統的な住居文化が朝鮮時代の社会構造とユニークな儒教的両班文化をよく表していて、そのような伝統が悠久の歴史の中で完全に持続している点が評価され、世界遺産に登録され

た。またこの村は川がS字になり取り囲まれるような珍しい形になっている。



3 日目

朝鮮時代の3大市場の一つであった西門市場へ。食べ物の屋台に野菜、海産物、穀物、さらに衣服などあらゆるものが一つの市場に集まっていた。平日にもかかわらず多くの人々が市場にいて、賑わっていた。続いて向かった香村文化館では、展示品や資料を見ながら香村や大邱の歴史を学ぶことが出来た。



4 日目

最終日はソウルを訪れ、初めに光化門広場を通過して、景福宮へ。ソウルの都会の街並みの傍にありながら、自然と伝統建築とに囲まれたその地は朝鮮王国の歴史と文化を感じさせた。その後は仁寺洞通りを歩いた。ここは規制によりすべての看板がハングルらしく、それもあってか古都を感じられた。

感想

初めて行った韓国は異質な地であった。しかし、日本でみるような風景も諸所に見られた。いわゆる若者の街のような所では、東京などの都市部に似た感じであった。建物や食べ物、飲み物にお店などすべてにおいて文化、伝統の違いが実感できた。とくに印象に残ったのは香村洞で日本家屋のような木造建築の家々があったこと、またその香村洞の中で

再興を試みる人々の活動、それから西門市場や他にもみられた屋台のような出店のようなお店の出し方に日本との共通点や違いが感じられたことである。

6. ワークショップ I 「就職するなら地元か東京・ソウルか」

今回の韓国での PBL プログラムの一つとして就職するなら地元と東京・ソウルどちらにしたいかというワークショップを行った。その結果、ほとんどの韓国の学生は就職するなら地元よりもソウルが良いと回答した。その理由は収入が高いこと、沢山の会社があること、海外へ移動しやすいこと、有名なイベントが開催されること、観光地が多いなどが挙げられた。一方、地元が良いと回答した学生の理由としては、地元の自然の豊かさ、住み心地の良さ、家族・友人などとの交流のしやすさ、また人混みを好まないためなどといったことが挙げられた。反対に日本の学生の多くは地元就職したいという意見が多く挙げられた。理由は住み心地の良さ、環境の良さ、知り合いとの交流のしやすさなど韓国の学生の意見と類似したものが挙げられた。東京に就職したいと答えた学生の意見は、収入が多い、色々な仕事を選べる、沢山の会社があるなどが挙げられた。このことから、ソウル・東京を選んだ学生が就職において優先していることは主に経済的な潤いであって、地元を選んだ学生が優先していることは経済的な潤いよりも生活する上での周囲の環境の良さであると考えられる。この意識の違いによって就職への考え方が違ってきていると考えられる。これらのことを踏まえて考えると韓国の学生の多くは、就職において経済的な潤いを優先的に考えていて、日本の学生の多くは、住み心地や自然など周囲の環境を優先的に考えていると思われる。

次ページの資料はワークショップで挙げられた意見の集計である。

Where do you want work in



SEOYEONG - **Busan** has many place to go out. Seoul is good city but I think Busan also have good infrastructure. And Busan has many vacation spot and has many good natural view.

MINHO - Seoul is good city at learning education, culture ...etc. But **Changwon** is also good city compare with Seoul. In modern society, If I want to use infrastructure like a Seoul, I can use it in Changwon.

HUKA - First, I can meet my friends and my families. second, I can spend comfortable because I have lived so long in **local**.

MINSEUNG - Expectation about **big city**. And I want to growth my capacity. Seoul is better place to grow than Daegu.

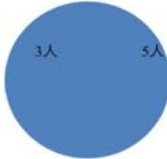
SEUNGJAE - I want to go to **Seoul**. There are few infrastructure and medical, cultural facility except capital area. And wages are low, few jobs are available.

HUMI - **Tokyo** has many choices of jobs. The wage is higher than Hiroaki in Tokyo. And the way of traffic is more convenience than Hiroaki in Tokyo.

SEUNGMIN - I don't want to leave my home town. I want to work in new place with new people.

グループ 1

Capital vs Hometown _ 2nd team



Capital - Tokyo & Seoul etc

- Many corporation / almost 50%
- Good transportation network & living convenient
- More earn money than local _ Taiki , kousuke, Kaka
- 2(2/3) Japanese & 3(3/5) Korean choosed

Hometown

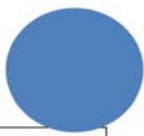
- Natural condition is better than capital _ Nayoung
- To close their family _ Toi
- Individual preference _ Jiwon
- 1(1/3) Japanese & 2(2/5) Korean choosed

Toi
"I don't like Tokyo because noise & crowded"
Jiwon(Ami)
"living condition and Daegu is enough to live"

Kousuke & Taiki
"a lot of corporation"
"many events"
Seungcheol(after)
"living convenient & much income / wages"



グループ 2



Where do you want work

Total 8 people

Seoul & Tokyo

kotaro - high income

- many big company
- Easy shopping

Haesoo - Location of the company

Soyoung - Famous festival

Hyunjeong - Wanting to live alone

- Location of the company

Jongsu - selecting various job place

- Concentration of infra

Hyobin - Good location to go abroad

- Conference, exhibition

Daegu & Hirosaki

Emiko - Attachment to native city.

- Low product cost.
- Live with family.

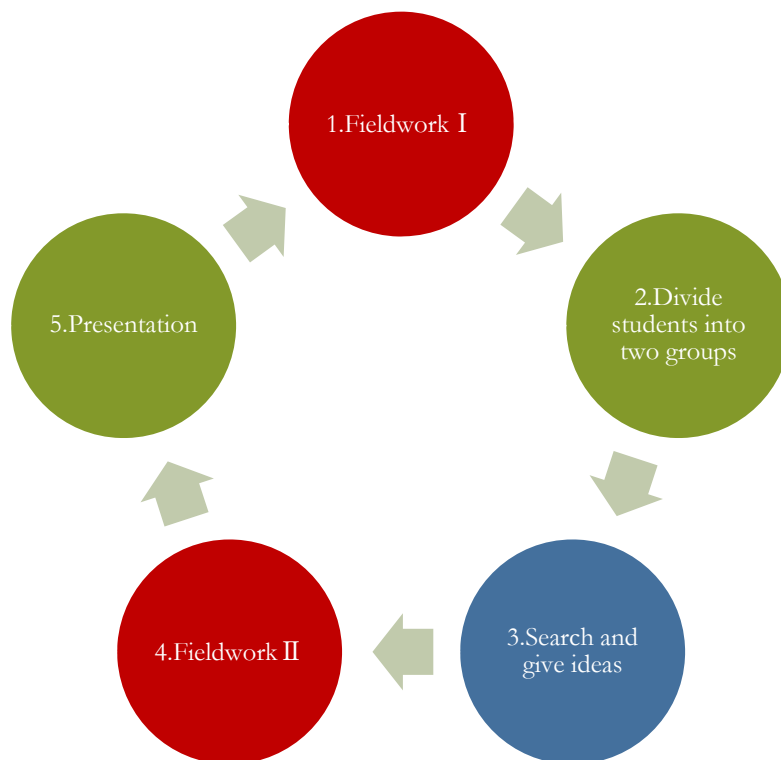
Machi - Hate crowd train during the rush hours

- Don't have to go shopping in a large city because development of internet
- Hirosaki prices are low
- Natural environment.

グループ 3

7. ワークショップⅡ「新しい教育プログラムを考案せよ」

- グループ1 地域活性化プログラム



私たちは韓国で地域活性化プログラムを提案した。

まず、地域活性化に成功した市町村の共通点は全部で4つある。それは、縦社会ではなく横のつながりがあるということ、自分で地域について真剣に考えること、実際にその地域に行くこと、他地域の人や大学などと連携することである。この共通点を取り入れたのがこの教育プログラムである。また、地域活性化に成功した地域の例としては、鹿児島県鹿屋市串良町の柳谷集落がある。この地域では以前から畜産による悪臭や糞尿の問題があったが、柳谷集落は鹿児島大学が土着菌を使って悪臭対策を研究していることを知り、集落の畜産農家に呼びかけて研修を受けてもらった。そして、悪臭対策だけでなく、土着菌を活用したカライモ栽培やそれを原料にした芋焼酎を作り、商品化にも成功した。この芋焼酎は韓国にまで輸出できるようになったのである。

こうした成功事例をもとに私たちは、悪臭問題のように地域の悪いイメージを改善する方法を考えるグループと土着菌のようにその地域にあるものだけを使い、商品化をすることで地域ブランドを確立するグループに分けて考えることが必要だと判断した。

そして、実際に地域に行くことで現状を知るとともに、自分の興味のあるグループを決

める。自分のグループが決まれば、まず各自で地域活性化の方法などを調べる。そして、グループでディスカッションをする。グループでディスカッションをしたら、再び地域に行き、自分たちの考えに問題点などはないかを確認する。そして再びグループディスカッションをし、修正すべきものは修正する。次に、大学の文系の教授や理系の教授に自分たちの考えを聞いてもらいアドバイスをもらう。最後にそれをまとめ、最終発表をする。

文系と理系の教授からアドバイスをもらうのは文系の視点と理系の視点を取り入れることでさまざまな視点から地域問題を捉えることができるからである。

評価方法と授業のスケジュールに関しては以下のとおりである。

地域活性化プログラム

• 評価方法 毎回の授業での反省レポートなどによって評価する また、最終発表はパワーポイントで発表する パワーポイントのでき、授業の出席率でも評価する。	• 第1回 下見 • 第2~4回 地域活性化の方法などを調べたり、考える、ディスカッション • 第5~7回 フィールドワーク • 第8~9回 意見等を修正 • 第10~13回 大学の教授の協力 • 第14回 まとめ • 第15回 最終発表
---	---

韓国の学生から指摘されたことは、グループを二つに分ける必要はないということである。まず、地域の悪いイメージや問題点を解決し、それから商品化をする方向でも良いのではないかということである。また、学生ならではのアイデアを取り入れた教育プログラムにして欲しかったという意見もあった。そして、このプログラムは従来の地域活性化プログラムと同じであるといった指摘も受けた。

したがって、学生ならではのアイデアをこの教育プログラムに取り入れれば良かったと思った。また、韓国の学生から意見をもらったことで違う視点を取り入れることができたので良かった。

7. ワークショップⅡ「新しい教育プログラムを考案せよ」

- グループ2 地域インターン

今回、私たちは参考資料のような教育プログラムを考えた。韓国の学生と議論を交わす時間がなかったので、自分たちの意見のみで構成されている。対象は大学がある地域の大学生と、同じ地域の企業を想定している。

プログラムの目標として、「地域に特化した学生を育てること」「育てた学生を地域に留めて地域人口を増やすこと」を設定した。これは、地域企業のインターンシップを行うことで地域企業や地域について深く知り、大学生が都会への憧れやなんとなくの理由で地域を離れることを防ぎたいという狙いから設定した。また、大学生が地域に留まることで、人口が増加や経済の活性化・地域活性化などの効果を期待することが出来る。

次に講義を通じての学生・企業のメリットについて触れていく。2回目・3回目の講義で学生は企業について調べ、説明会に参加する。これにより地域企業の魅力を再発見し、インターンでのミスマッチを防ぐことが出来る。企業は、ネット上や冊子では伝えきれない部分の発表をすることが出来る。

4回目・5回目では実際に働くときの注意点やマナー講座、インターンシップで何を不得たかをグループで目標設定する。企業は、学生に働いてもらう時のミスを少しでも減らすことが可能になり、学生もスムーズな仕事・講義まとめを行うことが期待できる。

そして、6回から11回目まで実際にインターンシップを行う。講義時間内でインターンシップを行うことで、学生は長期期間中に県外企業のインターンシップに参加したり、留学などに時間を使ったりすることが出来る。さらに、インターンシップに参加することで地域の企業の業界研究にもなる。企業は学生に参加してもらうことで、学生目線での新たな問題発見になる可能性がある。

12回目と13回目では、インターンシップで得たものや、学生から見た地域が抱える問題、それらを踏まえたこれからの地域のあり方などをまとめてもらう。そして、14回目15回目の時間では、インターンシップ先の企業や学生を集めてまとめたものを発表する。ここで新しい地域活性化の方法の提案と、学生目線でのインターン先企業の課題を発見する。

以上のようなプログラムを通じて、学生の地域に対する理解を深めて、地域に貢献・地域に留まるきっかけを作る。企業は、インターンシップを通じて、新しい課題の発見、就職希望者の増加が期待される。

次ページに参考資料を示す。

参考資料：講義スケジュール

講義名：地域インターン・地域就職

回数	内容	目標	期待されるメリット	
			学生	企業
1	オリエンテーション	授業について説明		
2	事前調査	参加してくれた企業を調べる	地元企業について知れる	
3	説明会	実際に企業の方からの話を聞く		学生に取り組みを発表できる
4	グループ分け、勉強会、マナー講座	グループに分かれて仕事内容や社会のルールを勉強する	社会に出て必要な知識をこの場で学ぶことができる	学生に働いてもらう際の心配点を減らす
5				
6	インターンシップ	実際に働く。企業の良さや課題、働くことに関して様々なことを考える	・インターンシップを長期休みの時間を使わずに行える	・若者に取り組みを教えることができる
7			・地元の産業について学ぶことができる	・学生たちの助けを借りることができる
8				
9			・地域の課題について認識することができる	・若い人の目線で自分たちの仕事を見つめることができる
10				
11				
12	まとめグループワーク	インターンシップを通じて学ぶことができたこと、また改善点などをパワーポイントでまとめる		
13				
14	政策提案プレゼンテーション	インターンを通じてのまとめを発表する	地元の産業活性化	・自分の企業をアピールしてもらえる
15				・課題などを再認識できる

〔2〕国際交流プログラム感想

14H3019 小野考丞

今回の PBL プログラムを通じて学べたことを「日本での交流編」「韓国訪問編」「学生から学べたこと」の 3 種類に分けて述べていく。

● 日本での交流編

始めに、韓国の学生の発表から見ていく。

韓国の学生のパワーポイントは、日本の学生が作るパワーポイントよりも図や表、写真などの使い方が非常に効果的な使い方をしている印象があった。図や表も動きを付けて聴者の目を引くような工夫をしていて、発表にひきつける仕掛けを上手く用意されていると感じた。班の人たちで情報の取捨選択や見やすさなどについて議論を多く重ねたからこそあのクオリティのパワーポイントが完成されたのかなと思う。自分たちのパワーポイントを作る際にも、今回の経験を参考に聴者の視線を重視したものを作っていきたい。



また、韓国の学生を案内するとき、自分たちのリーダーシップが充分でなく上手くグループとして統率することが出来なかった。自分たちのゼミがリーダーシップを発揮できるように確認・協力をする必要があったと思う。案内をする場所の知識も少なく、十分な案内をすることが出来なかったので、これから普段の発表をするときには準備・確認を怠らないようにしたい。

● 韓国訪問編

次に、韓国の訪問から学べたことを見る。

慶北大学の周りには飲食店が多く、気軽に立ち寄れるような距離で店が立地されていて、学生が集まるきっかけになっている



なと思った。学園都市や学生に優しい街を作るためには、食事と住まいの分野で距離を意識した街づくりが必要になると感じた。

学生に案内されたカフェでは周りが暗い雰囲気の中、凜と立っている木造の建

物が印象的だった。この地域は必ずしも地域一体となって「地域を良い方向・明るい雰囲気に変えていこう」としているわけではないが、先陣を切っているカフェの人の思いを広めようとしている学生の姿勢が素晴らしいと思った。欠点や短所が多い中で、数少ない長所を生かして地域を輝かせようとする発想が自分たちのプロジェクトでも生かすことの出来そうな考え方だった。

● 学生から学べたこと

今回の PBL プログラムで終始感じていたことは、韓国の学生の「積極性」は見習いたいということだ。話している英語は外国語として勉強したものとは思えないくらいの流暢さと語彙力の豊かさであったし、日本語を少しでも話せるようになろうと色々な言葉を尋ねてきた。自分たちは英語の準備を満足にすることが出来ず後手に回ることが多く、自分の言葉で話せないと伝えたいことを十分に伝えることもできないので、深い議論を交わすことが出来なかった。

また、発表に対する質問が非常に多かった。日本では質問を促されたり、指名されたりしてから質問をするが、韓国の学生は自ら質問をしていた。さらに、ただ質問で終わるのではなく「発表者は〇〇についてどう思うか」と質問することも多かった。発表のパワーポイント準備においても、発表当日の朝に変更を重ねていて、発表を良いものにしたいという積極的な姿勢が伝わった。こうした学習に対する食欲な姿勢が完成度の高い作品・発表につながるのかなと思った。

今回の PBL プログラムで韓国の学生と過ごしてみて、周りに合わせた行動をすることも大切だが、勉強や発表の場では積極的に取り組んで少しでも何かを吸収しようという積極的な姿勢をとりたいと思えることができたことが、自分にとっての一番の収穫だと思う。

14H3025 川口晃太郎

1) PBL プログラムで学んだこと

今回の PBL プログラムで韓国に行った事で私が学んだ事は、国や環境の違いがあっても共通する価値観や考え方をしているということもあるということだ。韓国の学生のプレゼンテーションの中で最も私の印象に残ったのは、大邱の活性化についてのものである。昔使われていた建物を今改装して再利用して喫茶店や飲食店などに改装することで大邱を活性化していこうというのが韓国の学生のプレゼン内容の主な部分であった。モノを再利用して大切に使うというのは、古くから日本の「もったいない」の精神が伝わって

きていると私は思っている。また、モノを再利用して利用するというのは現代の大量消費大量生産が主流になっている中では、あまり重要視されていないようにも感じていた。しかし、韓国の学生のプレゼンを聞いて、考え方が日本人に近いように感じた。実際に韓国での課外活動を通して、日本の占領下自体の家屋を利用して喫茶店を営んでいる建築家がいる事を知って、この活動に対して意欲的な人達も存在していることが分かった。お互いの国に共通して考えられることは、昔から残っている伝統を守っていこうとしていることが挙げられると思う。

また、今回の PBL プログラムで自分達が住んでいる弘前という地域への認識不足も感じた。韓国への弘前案内をして、普段生活していたらあまり行かないような場所に多く行った。ねぶた村や林檎の生産をしている農家さん、黒石で日本酒の醸造をしている酒屋さんなどが挙げられる。韓国での経験を踏まえて改めて弘前を見ると、もっと活性化することができるように感じた地域なども見つかった。例えば、黒石地域には、古くからの日本の家屋が多くあり、街並みの雰囲気も良く感じたのだが、あまり賑わっているようではなかった。韓国の学生のプレゼン内容を参考に考えると上手く利用されていない黒石の家屋を利用してお店を営むことなどで活性化が考えられる。この PBL プログラムを通して、今まで知らなかった弘前の魅力を見つけられた事は、地域活性化を考える上で普段目に止まらない部分にも意識を向けることの大切さを知ることができたという点で私にとって大きな成果だった。地元の活性化を考える時大切なのは知っている気にならないで、一度ゆっくり地元を見回すことなのではないかと思った。

2) 韓国の学生との関わりで学んだこと

韓国の学生との関わりで学んだことは、共通言語の重要性である。今回のプログラムで交流した韓国の学生の多くは十分通用する英語力を持っていた。それに対して日本の学生の英語力はコミュニケーションを取るには不十分なものだった。勿論、お互い言語があまり伝わらなくても共通の話題などがあれば理解して交流できたのだが、共通言語を通してのコミュニケーションが容易に取ることができれば、もっとたくさんの情報を共有することができたと思う。日本の学校で習う英語と日常生活で使う英語の間には差があるように思った。このようなプログラムで海外の人達と深く交流するためには、共通言語の習得は前提条件として必要だと感じた。

また、韓国の学生と日本の学生の違いとして韓国の学生は物事に対して積極的であるように感じた。例えば、韓国の学生中には日本語を話す人もいたのだが、私達が話す日本語に対して分からない時はすぐに意味を聞いてきて、どんな事でも吸収しようという点で積極的、また勉強熱心であるように感じた。私もそうだが、日本人は何方かと言えば引込み思案、奥手というイメージがあるが、この積極的に物怖じせずに物事に向かっていくという姿勢は韓国の学生から学ぶべきポイントの一つだと思う。また、ワークショップでの就職するなら地元か北京(東京)がいいかという課題についても日本の学生

とは違った結果が見て取れた。日本の学生は地元就職したい人と東京に就職したい人はほぼ同じくらいだったのに対して韓国の学生の多くは北京に就職したいと答えた。理由は大きな会社に就職したい、収入がいい、大きなイベントが沢山あるなど色々あった。この結果をからも韓国の学生の将来成功してやろうという積極的な姿勢が考えられる。

14H3030 工藤透生

交流の前半である日本でのプログラムでは、外国の方と接する機会は今までになく、また得意ではない英語でのやり取りを行うということで、緊張が大きかったです。しかし、積極的に話しかけてくださったり質問をしてくれたりしたので比較的すぐに緊張は解けました。その後簡単な自己紹介の後に韓国の学生のプレゼンテーションの発表を見ましたが、図やイラスト・写真を効率的に利用しながらわかりやすくまとめられていたパワーポイントや堂々とした英語の発音など、プレゼンテーションのクオリティの高さに驚かされました。自分たちがプレゼンテーションを作ると文や説明がどうしても多くなってしまいがちなため、このようなパワーポイントを用いたプレゼンテーションは今後の発表の際に非常に参考になるものでした。しかし、自分の力不足もあり、英語が完璧に理解できなかった部分もあり、もっと内容を理解し詳しく議論することができればより良い時間を過ごすことができたのではないかと思います。また、このプロジェクトの中で弘前市内や周辺地域を案内した際には、日本の中では当たり前であり見逃してしまうようなことに一つ一つ注目していたため、改めて日本らしさを感じることができました。

後半に自分たちが韓国に行った際にはハングルの表記が全く理解できず不安になることが多々あったが、慶北大学の学生さんたちの手助けのおかげで大きな事故や間違いもなく過ごすことができた。韓国でのワークショップでは日本で行ったワークショップよりも自分の英語力不足によって意思疎通がうまくいかないことがあり、伝えたいことを伝えられない歯がゆさを感じることもあった。準備の時間がもう少しあり、情報の伝達がもっと徹底されていればより有意義にすることができたのではないかとも思う。観光国内では実際に発表にあった香村洞や伝統的な村を実際に見ることができてよい経験になりました。香村洞の復興のために伝統的な建物を再建してカフェを始めた方の話が非常に興味深かったです。暗くなってしまった地域を、伝統と文化を引き継ぐことで明るく変えていこうという考え方に感動しました。ソウルでは京福宮や仁寺洞通りなどを見学し、韓国の歴史や文化に直接触れ、学ぶことができました。



韓国の学生さんたちと接して一番心象的なのは自分の質問や意見をどんどん言うところです。日本では質問の時間をとられても積極的に出てくることは少ないですが、韓国の学生さんたちは少しでも疑問に思ったことや気になったことをどんどん質問していました。また、これと同様に日本ではなかなか自分の意見をいわず、周りにただ合わせるだけという人が多いですが、皆がどんどん自分の意見を言っていたと思います。そうすることで全員の中で一番いい答えや意見を採用でき、このように積極的に発表していくという姿勢は非常に重要ではないかと思いました。また、日本でのワークショップのほかに「地域課題研究 A」の講義中で行われた日韓交流アクティブラーニングの発表前に、最後の最後までプレゼンを修正したり英語の確認や原稿の手直しを行っており、発表に対する粘り強さも感じました。

文化や環境が違う中で育ったため、価値観や物の見方も異なっており、そんな中で様々な交流を行うことで日本人と交流するだけじゃ得ることができない学びができました。これは本当に貴重な経験であったと思います。非常に内容の濃く有意義な 10 日間を過ごすことができました。これらの経験を今後の学生生活やゼミでの研究に活かして頑張りたいと思いました。

14H3035 児島楓華

国際 PBL プログラムで異なる価値観を持つ韓国の学生のアイデアや意見、そして韓国での事例を得ることができた。特にそれを実感できた場面はワークショップである。

ワークショップでは就職するなら地元か都会かについて議論したが、韓国の学生は韓国

での現状について詳しく教えてくれた。ソウルには大企業が集中し、地方には中小企業が集中していることや大都市に憧れを持っている人が多いことや、人はソウル、馬などといった自然のものはチェジュ島に集まる伝統が韓国にはあるといったことなどである。また、こうした事例だけではなく、意見も言ってくれた。例えば、弘前市と大邱を比較すると、弘前市は地域づくりに積極的であり、一方の大邱は若者の仕事探しが熱心であるため、地域づくりには消極的であるという現状を踏まえ、大邱にも地域参加型の授業（弘前大学の地域課題研究 A という授業）を増やせば地元愛の創出につながるため、積極的に導入すべきであるといった意見や若い世代が地域のことをより知っていなければならないといった意見などである。

また、韓国の学生はパワーポイントを作成する能力に非常に長けていた。私たちが作成したパワーポイントは文章量が多く図や地図、データ、表が少なかった。しかし、韓国の学生が作成したパワーポイントには図などが多く用いられ、必要最低限のことを文字で記載し、簡潔にまとめられていた。そして、ワークショップの内容を一枚のスライドにまとめる際にも短時間でグラフを作成し、内容を簡潔にまとめていた。日本の学生は普段からスマートフォンといった電子機器を使いすぎてパソコンをあまり使用していないということを改めて実感した。また、このワークショップを通して、国が違っても同じ問題を抱えているということや国が違えば視点も異なるということがわかった。

ワークショップ以外で学んだことも多かった。それはコミュニケーションの取り方である。ワークショップ以外でも韓国の学生と共に行動し、コミュニケーションを取った。私たちは英語でコミュニケーションを取らなければならなかったため、上手に英語を話せず言いたいことが伝わらなくて辛いときもあった。しかし、ジェスチャーでコミュニケーションを取ることで相手に伝わったこともあった。たとえ、言語が違ってもジェスチャーで伝わることもあるということ、そして世界共通語である英語を話すことができればもっと簡単にコミュニケーションを取ることができるということを学んだ。

また、韓国の学生はコミュニケーション能力にも非常に長けていた。私たちは英語を上手に話すことができず、コミュニケーションを取ることができないことを理由に受け身であったが、韓国の学生はわかりやすい英語やジェスチャーで積極的にコミュニケーションを取ってくれた。こうした点から、私たちはコミュニケーション能力が低いということを痛感した。

韓国の歴史についても学ぶことができた。大邱のカフェに行き、多くのことを聞くことができた。例えば、韓国併合後に大邱は日本町となり、植民地時代を恥じる人が多かったことや若者が都会へと行ってしまったことなどである。そうした植民地時代の過去があるため、日本が嫌いという韓国人はいるが当時の思い出を懐かしみ、好んでいる人も多いということや大邱のカフェのように日本人と韓国人が触れ合う場所があるということを知った。さらに、地域問題に取り組む時は国家が動くのではなく、まず民間が動くことが重要だということも教えてもらった。

また、私たちが現在取り組んでいる県プロの内容を韓国の学生に英語でプレゼンした。私たちの県プロは青森県の人口減少対策として県内姉妹都市計画を実施し、都市を結ぶために県内の特産品を用いておにぎりを作ることで郷土愛の創出をはかるとともに、地域間交流を促進し、最終的に人口減少問題を解決することを目指すプロジェクトである。この県プロの内容を韓国の学生に聞いてもらった結果、なぜおにぎりが郷土愛の創出をもたらすのか、なぜおにぎりでないダメなのか、おにぎりが人口減少問題を本当に解決するのかなどの指摘を受けた。このような指摘を受けたことで私たちの県プロの内容はまだまだ穴があるということを実感した。

そして、指摘を受けても全て答えられるようにしなければ県プロの最終報告会は乗り切れないと思った。

以上のことから、国際 PBL プログラムで学んだことはとても多かった。韓国の学生のパワーポイントやプレゼンの能力の優秀さ、コミュニケーション能力の高さ、そして韓国の歴史や現状について学ぶことができとても充実した二週間であった。コミュニケーションにおいて学んだことは海外の人と会話する時に英語を話すことができなければならないこと、受け身ではなく積極的にコミュニケーションを取ることがとても重要だということである。

また、異なる価値観を持つ海外の学生と交流したことでさまざまな視点、考え方を得ることができたため、視野がとても広がった。韓国でも同じ地域問題を抱えていることを知ることができたので良かった。そして、韓国の学生と日本の学生で同じ問題に取り組むことはとても貴重な体験であった。このような体験は私に課題を与えてくれた。その課題はパソコンをもっと使うことができるようになること、英語を話すことができるようになることである。国際 PBL プログラムがなければこのような課題を見つけることはできなかった。

最後に、このような貴重な機会を設けていただきありがとうございました。

14H3072 中林大紀

1. PBL を終えて

まずは、私たちは青森県について何も知らないなということを痛感させられた。韓国の学生に弘前を案内するときにまず自分たちが一から弘前を勉強する必要がある、また質問を受けても答えられないことが多かった。私たちは県庁プロジェクトという取り組みの中

で、青森県を変える企画を考えていますが、もっと青森や弘前について知らなければいけないと思った。

また、いろんな考え方や方法が学べたことは大きかった。自分たちだけでは見られなかった視点を知れた。韓国で行われる経済的な政策や行政なども知れた。私たちの発表の時にも多くの意見を述べてくれたので、改善点もわかった。韓国では過疎地に対しての経済的な政策として都市部の主要な機関などをその過疎地に移動させることで、人と会社を動かして活性化させるというような政策があるらしい。日本では珍しいことだと思った。日本では都市部にどんどん人も会社も集まっていて、公的には補助金を出すといった政策が目立つ。このようなやり方の違いはいい例になるし、参考になると思う。また、韓国ではこのようにして移動してきた人たちとその地域の人々の間の壁という問題もあるらしく、日本でも同じことがあると思った。韓国の学生はプレゼンテーションを使って発表するのが非常に慣れていて上手であった。プレゼンテーションは良く工夫されていてわかりやすく、発表も聞きやすくわかりやすいものだった。これは日ごろからこのような実践的な授業や取り組みをしているからなのか、私たちもこれに倣ってもっと実践的な取り組みに積極的に参加する、またこのような機会を増やしていけばいいと思った。

2. 韓国人学生と交流して

まず私たちとの文化や慣習の差に驚かされた。同じアジア圏にある国でもこんなにも文化は異なるのだなと感じた。韓国の学生方はいいい意味でも悪い意味でもマイペースであった。自分の意見をしっかり持っていることや、それをちゃんと人に伝えること、またわからないことを積極的に質問し解決しようとする。私は特にそういう部分で消極的なので、見習って積極的な人間になりたいと思った。

また、言語の壁が思っていたよりも厚く感じた。私は英語も全く話せないのに、言葉を伝えられなくてもどかしい気持ちに何度もなった。議論をするときは通訳の先生や日本語を話せる学生がいなければ意見を伝えるのが困難だったろうと思う。しかし、その中でもジェスチャーや単語などで工夫して伝えると、対話することが出来た。韓国の学生は私たちよりも英語を話せていて、どんどん話してきた。私は初めて英語って大事だなと思った。高等教育までの英語の学習では話すことや聞くことが上達しないので、日常的に使う必要があるし、留学などもどんどんしていくべきだと思う。将来使わないと思っていても、今は国際的な社会なのでスキルとしてあればいいと思う。

そして、このような非常に貴重な経験をする事が出来て本当によかった。初めて外国人と交流し、外国に行き、いろいろ戸惑ったこともあるが違った価値観や考えを見ることが出来、多くの刺激をもらい、自身にとってとてもいい勉強になったと思う。このプログラムに関わった方々に感謝したい。

14H3091 堀川瑛美子

私は7月3日から15日まで慶北大学と弘前大学との間で行われた海外意見交流会であるPBLプログラムに参加した。PBLプログラムでは、弘前市内とテグ市内の視察や地域を活性化させるための案や教育カリキュラムについて議論した。私はそこで韓国の学生と触れ合うことで、日本の学生とは異なる意見や考え方を学んだり、日本と韓国の文化や国民性の違いを知るなどとても貴重な経験をする事ができた。

意見交換では、韓国の学生、日本の学生がそれぞれの住んでいる地域を活性化させるための提案をした。韓国の1班は暗く老朽化しているというイメージの香村洞の建物を地域住民達で明るいものに再建することで活気を取り戻す、という内容の発表であった。2班は伝統酒を通じて地域間で連携した慶北伝統酒ロードをつくることで、伝統と現代を疎通させ、多くの人の交流が期待できると発表した。3班はテグの安心地区へ移動してきたビジネスマンと地域住民との間の心の壁を交流活動を通じて取り除き地域間のコミュニティをつくることで、地域の問題を解決する重要なカギになると発表した。また、私たちは青森県に姉妹都市をつくることで、地域間の交流が生まれ、県外への人口流出を防ぐことができると発表した。



ワークショップでは、都会と地元のどちらに就職したいかを班に分かれて議論した。都会での就職を選んだ理由には、就職したい企業が地元にはないこと、都会には会社がたくさんあること、よりお金を稼ぐことができることなどが挙げられた。一方、地元での就職を選んだ理由は、家族と一緒に居たいことや地元への愛着があることであった。韓



国の学生も日本の学生も就職先を選ぶ理由は同じであったが、韓国の学生は都会での就職を選ぶ学生の比率が日本の学生よりも多かった。また、日本の学生が2つの班に分かれて今後のPBLプログラムで行う教育カリキュラムも提案し、私の班では地域活性化教育プログラムを発表した。まず、地域の視察を行い、現状を知る。その後、悪いイメージを良いイメージに変える方法を考える班と、その地域にあるものを使って新しいものを作ることで地域のブランドの確立を目指す班に分けて地域の問題を解決するアイデアを考える。アイデアを出したら再び

現地に行き、アイデアの問題点や実現可能かを聞いて修正し、最後に発表するという内容であった。このカリキュラムを、韓国の学生や教授の意見を聞いて修正した。

弘前やテグを視察する際、学生が地域の案内をした。弘前の視察で韓国の学生はりんごの作り方や歴史、また日本の伝統的な建物に関心を示していて、熱心にメモや写真を撮っていた。日本人にとっては当たり前のものだが、外国人にとっては珍しいものなのだなと思った。私はテグでの視察ではカフェ **Haru** が一番心に残った。ここは韓国 1 班の発表で地域活性の一例として紹介された場所で、昔は防空壕であった建物を改装して建てられたカフェである。カフェに入って一番に目を引いたのはたくさんの本であるが、その中には多くの日本の本があった。ここには日本語を学ぶ学生が多く来るようで、また総領事館とのワークショップや、研究者同士で議論が行われるなど、日韓交流の懸け橋となっている。今の韓国の人たちは日韓間の歴史をポジティブにとらえて活動していることに感動した。

私が一番に驚いたのは韓国の学生の英語力の高さである。日本の学校でも英語は中学校や高校では必修であるため、英語を学ぶ機会は多かった。しかし、日本の学校で習う英語はあくまでも読み書きが重視されていて英語を話したり聞いたりするなど実用的なことはあまり教わらなかった。また、私も自主的に英語を学んでいかなかった。そのため、私は自分の言いたいことが思うように伝えられなかったり、相手が言いたいことをうまく理解することができずに悔しい思いをした。一方、韓国の学生はみんな流暢に英語を話していて、発表も会話も自信に満ち溢れていた。そのうえ、日本語を話せる学生も何人かいた。韓国の学生から話を聞いたところ、韓国では留学する人が多く、海外に対する意識も高いそうだ。自分の意見を伝えるためには、私も韓国の学生を見習って積極的に英語を学び、話せるようにならなければいけないと思った。

私は **PBL** プログラムを通してもっと多くのことに興味を持つ必要があると考えた。韓国の学生に弘前を案内するときや弘前について質問されたときにうまく説明することができず、自分の住む地域についてちゃんと知っていなければならないと思った。また、韓国の学生と交流するからには、韓国の文化や流行を知っておくべきだと思った。相手は日本について関心を持っていて、会話をするときには日本のドラマや会社のことについて積極的に聞いていたのに、自分は韓国のことをあまり知らず、現地で見たものを聞くことしかできなくて申し訳ない気持ちでいっぱいだった。また、韓国の学生から見習うべきものもたくさんあると思った。プレゼン発表のとき、日本の発表に比べて韓国の発表は写真や現地の情報が多く、相手の興味を引くものだったと思った。また、韓国の学生は日本の発表にたくさん質問をしていた。自分は全く質問できなかったのもっと理解を深めて積極的に意見を出せるようにしたい。



2週間という短い期間であったがこの経験で、自分が成長する上で必要なことや、学ばせたい多くのことに気付くことができた。今後の活動でもこのPBLプログラムで学んだことを生かしていきたい。

14H3097 眞土修太郎

日本編

日本で行ったワークショップでは、韓国の学生のプレゼンテーションを聞いた。1班の発表は、現代の分化から取り残され、大人の街として暗い雰囲気となってしまった香村洞をどうにかして明るくする方法はないかという発表内容だった。昔の香村洞には、多くの作家がいたという歴史があった。この文化的な歴史を活用することで大人の街ではなく、若者も関心を持てる街として明るい雰囲気を作りだそうという提案だった。実際に、多くの本があるカフェのオープンや古い壁にペイントをするという取り組みが行われている。2班の発表は、安心地域における格差をどのようになくしていくかという内容だった。行政機関の集中を解消するために、各地域へ機関を移動した。その結果、その地域では、もともと住んでいた人と職場の移動でやって来た人との間に格差ができてしまった。格差を作っているものは、物理的な壁である高速道路と環境の違いによる精神的な壁がある。この2つの壁を壊すためには、多くの人が安心 **commune** について知ることと赴任して来た人が **commune** に参加することが重要であるということがわかった。3班の発表は、韓国の伝統酒を使って、地域を結びつけることで、現代社会に生きる人々が忘れてしまったものを取り戻そうという内容だった。具体的には、人と人との関わり、文化と歴史、過去と現代の繋がりといったものだ。これらの取り戻すことが地域の活性化のカギになるということを知った。どの班の発表も学生視点で、共感を持ちやすいものであると感じた。自分の中での地域の活性化は、行政主導で行っていて、お堅いイメージが強かった。そのため、自分の考え方を变えることができる良いきっかけとなった。また、自分たちが取り組もうとしている県庁プロジェクトにも、共通する部分が多くあると感じた。地域にある特産品を使うことで交流する機会を増やすことで、地域活性化や人口流出を抑制することが主な目標だ。1班の発表の内容にあった、住民が参加しペイントを行った取り組みのような参加型イベント。2班の発表にあった、異なる地域と交流し理解しあうこと。3班の発表の中にあった、特産品を用いた取り組み。これらの内容を参考にして自分たちの研究をよりよいものにしたいと思う。

ワークショップの他には、中心街、市内視察、周辺地域の視察を行った。韓国の学生たちは、日本の文化や歴史に興味を持ってくれていたと感じた。実際に、市内を案内して痛感したことは、長年暮らしてきた弘前でも知らないことはまだまだあるということだ。

KIMORI で聞いたりんごの歴史や産業についての話は、初めて聞くことが多かった。自分の地元について知らないことが多かったことは、恥ずかしいと思うと同時に、詳しく知りたいとも思った。自分がそうであるように、弘前について詳しく知っている若者は少ないのではないかと感じた。

懇親会やバーベキューでは、みんなと食事をとることで、距離感がぐっと縮まったと思う。一緒に食事をとって、コミュニケーションをとることは、親睦を深めるための手段として最も良い方法であると実感した。

韓国編

韓国で行ったワークショップは二種類あった。一つ目は、「就職をするなら地元 or 都会」という内容であった。全体的には、都会での就職を希望する人の割合が多かった。主な理由としては、「就職したい企業が都会にある」「賃金が高い」というものであった。韓国でも、都会志向の若者の割合が多いこと知った。自分は、消極的な意見で地元就職を選んでいたもので、積極的な意見をこれからの県庁プロジェクトや取り組みを通して見つけていきたいと思う。二つ目は、自分たちが教育プログラムについて考えるという内容であった。事例を調べて、教育プログラムを考えたのだが、弘前大学にある「地域課題研究」という講義に内容が似てしまったと思う。韓国の学生に自分たちの考えたプログラムがしっかり伝わらなかったことと内容が計画的でなかったため、もっと深く考える必要があったと感じた。また、学生視点で独創的な意見が欠けていた。韓国の学生の発表にあったような柔軟な思考が必要だと実感した。

韓国の視察では、各班の発表にあった、地域活性化の取り組みが実施された場所を訪れた。自分の中で一番印象に残っているのは、1 班の発表にあった香村洞を視察した際に行った、“café Haru”だ。店内はおしゃれな雰囲気、日本語の書籍がたくさん置かれていた。若い人から年配の人まで男女問わず入りやすそうな雰囲気で、また行きたいと感じさせる良いお店だった。香村洞は昔、日本人町だったそう。そういった背景から、現在は日本語講座を開いたり、日韓交流のイベントを行ったりしているそう。メディアに取り上げられたこともあり、日本専門の交流空間として有名になったそう。このカフェが若者と年配の人との交流空間になることが期待されている。また、その交流を通じて、大邱から大学卒業後にソウルに出ていく学生をとどめる効果も期待しているそう。具体的には、若者が年配の職人と触れ合うことで、選択肢をホワイトカラーだけでなく、技術職にも向けてもらい、人口流出に歯止めをかけるというものだ。カフェにこれほどの目的と役割があり驚いた。貴重な話を聞くことができとても良い経験になった。弘前でもこのような取り組みがあるか気になった。

全体を通して

約二週間の交流プログラムを通して感じたことは、コミュニケーションの難しさだ。普段生活している中で使っていた言葉が通じないという状況は、生まれて初めてだった。中学も頃から習っていた英語はだけでは、会話は難しいと実感した。伝えたいことをうまく伝えられないことが、とても悔しく、相手に対して申し訳ないと感じた。それでも、一生懸命理解してくれようとしていたことは、とてもうれしく感じた。お互いに馴れ、趣味などの他愛のない会話ができた時は楽しかった。韓国の学生は親切で積極的だった。自分も彼らを見習って、これからは生活したい。また、“café Haru”でお話を聞いた際の、「お互いに触れ合う機会がなければ分かり合うことができない」というフレーズが印象に残っている。このフレーズはこの交流を通して自分が実感したことであるとともに、これからのゼミやその他の活動でも大切なことであると感じた。交流プログラムは、忘れられない思い出と経験になった。



14H3112 山口紘史

韓国の学生と交流して特に自分に生きたと感ずることは、自分の世界が広がったことである。韓国の学生はパワーポイントの完成度、ワークショップへの取り組み方、英語技術など、どれも私の周りの日本の学生と比べて圧倒的に高い水準で取り組んでいたように思える。特に目を見張った光景は質疑応答時の質問の多さであった。私たちをはじめとする日本の学生は消極的なところがあり、何か小さいことに気がついても自分で自己解決しがちである。一方韓国の学生は小さな質問でも気になったことには積極的に発言し、今回も私たちでは気づかないところの指摘や、具体例を挙げた質問などによって理解を深めようとし実際により深い学習ができた。このように韓国の学生が多くの質問ができる理由として考えられることは、積極性もさることながら、普段から自分の身の回りの問題について多くの関心を持っているからだと感じた。ほかの人の発表についても自分の身の回りと比較することでイメージもしやすくなり、またその違いなどから疑問が生まれるという、常に周辺を観察しそれを結びつけるという思考が、質問の多さに直結していると感じた。これらの違いは国民性の違いでもあると考えられるが、韓国の学生のような参加態度は理解を深めるために実践すべきことである。今回の体験を通じて今まで自分は積極的に参加し理解した気になっていただけで、英語やパワーポイント内容などをはじめとし、もっと高い水準で行っている同世代の人たちを見て危機感を覚えた。こういった経験は普段の日常ではなかなか体験しにくいことであり、自分の世界から飛び出してようやく気づくことができると思う。そういった意味で身の回りと違う環境で学習できたことは、新しい発見や、改めて自分の能力について知ることができたため非常に有意義であったと思う。



一方で韓国の学生との共通点も見つけることができた。それは地域活性化に対するアプローチの仕方である。大邱も弘前と同じように人口流出の問題を抱えており、それに対して小さいコミュニティを生かした地域間の交流がより効果的である、と考えていることが私たちの考えと共通していた。今までは自分たちの考えに自信が持てずぼんやりとしていたが、違う国でも同じような取り組みが必要だと考えていること、また私たちの考えが通用することがわかり、班員の中で活動に対する自信が芽生えたと思う。また同時に韓国でも同じような問題、取り組みが行われているということは参考にもなったとともに、世界

のほかの事例について調べて参考にするということも効果的だと感じたため、これらの経験を自分たちの活動に取り入れていきたい。

他にも韓国の学生と交流する中で様々な伝統や文化的な背景の違いについて学習することができた。たとえば、風水を重んじていること、より成長するためにはソウル（都会）へ行くべきという伝統的な考え、目上の人に対する礼儀など、韓国の人の特色とも受け取れる部分である。このように伝統とはその地域に住む人々の人間性や特色も映しており、他人からすると興味が湧く部分である。伝統や背景の違いについて理解することはその地域の人を正しく理解する手助けになる、つまり伝統が交流の資源という側面も持っていることが改めて認識できた。こういった伝統の違いは国単位のみならず日本各地、さらには都道府県内の各地で存在するものであり、これらを理解することが地域間の交流において大いに活用できるものだと感じた。一方で韓国の学生が弘前の神社参拝のときに建物のつくりや礼儀、マナーなど疑問を持ったことに対して私たちが回答することができなかったこともあった。伝統は私たちにとって当たり前のこととして考えられていることもあり、資源としての側面見えにくくしている、ということもわかったので視野を広げることや、たとえば交流活動を考えるにあっても伝統や背景から検討するといった、多角的な視野・アプローチを考えることが今後の活動に生きてくるのではないかと感じた。



今回のプログラム全体を通して大邱と弘前という都市、各国のその周辺地域との交流、また韓国の伝統酒と弘前の黒石の酒蔵、そして韓国の学生と弘前の学生といったようにおなじようなテーマについてしかも国と国をまたいで比較することで、新しく発見できることや自分を見つめなおすことができたのは非常に有意義な交流活動であったと思う。また問題のある視点だけからみるのではなく、様々な視点から比較してみるという多角的な取り組みが重要であることが、実体験を通じてより直接的に理解できた。このように日常とはかけ離れた環境で学習したからこそ、多くのことを学び、考え方をはじめとして自分の世界を広げることができたため、これらを今後の自分たちの活動に反映していきたいと思う。